【研究論文】

日本における近年の母子関係研究の動向と概観

――妊娠・出産・育児というライフイベントに着目して――

西　山　直　子

1．はじめに

本稿では、創刊から数えて 20 年を迎えようとしている『発達心理学研究』（日本発達心理学会[編]、第 1 巻第 1 号～第 18 巻第 3 号）および『日本発達心理学会第 19 回大会発表論文集』のなかから、母子関係に関する研究を取り上げ、文献レビューを行う。

発達心理学は、人が生まれてから生涯を通じての、心の働きや行動の発達過程について研究する学問である。以前は、乳幼児心理学／児童心理学／青年心理学／老年心理学というように人の一生を年齢段階により区切って心理的発達の研究が行われていた。しかし、「それぞれの時期の発達も生涯の発達の流れのなかに位置づけて見るべきだ」という考えが広く認められるようになり、異なる年齢層を扱っていた研究者間の相互交流と知見の共有が進められるようになった。また、人の生涯全般を扱うこの研究領域は、心理学のみならず教育学や社会学、文化人類学など関連分野の研究者、あるいは保育・教育・医療・福祉など人の発達や養育にかかわる現場の実践家との交流や協力も不可欠で、社会的にも広く関心を集めている。初代理事長の東洋氏が創刊の辞で述べているように、発達心理学は「生涯性」「科学性」「学際性」を備えた勢いのある学問として発展してきたといえよう。

そのような気運のなかで、日本発達心理学会は、幅広い研究と実践とをいっそう推進することを目指して設立された。1987 年の夏、国際行動発達学会（ISSBD）の大会が東京で開催され、世界中から 1000 人を超える参加者が集まったことにそのきっかけはある。当時、ボランティアとして働いた若い研究者たちが、日本において発達研究の交流と活発な議論が行える学会が欲しいと切望し、3 年あまり熱心に準備してついに 1989 年 12 月に発足したものである。

以来約 20 年の時を経た。500 人余りで始まった学会も現在は会員数 4000 人を超える規模に成長してきている。規模は拡大しても、設立当初の志の高さはそのままに、意欲的で若々しく開かれた学会として盛んに活動が行われている。毎年 3 月に開かれる大会では、委員会が用意するシンポジウムや講演会だけでなく、会員が自主的に企画・提案した自主シンポジウムやラウンドテーブル（テーマ別懇談会）が数多く行われ、活発な議論が繰り広げられている。また、年間を通じて全国各地で研究会や講演会が開催され、元気のある学会として定評を得ている。

学会活動の中心とも言うべき機関誌は、その学会の研究活動の活発さや水準の指標ともなりうる。学術雑誌『発達心理学研究』は、創刊当初は年 2 回の発行であったものが現在では年 3 回のペースで発行され、すぐれた研究成果や大胆な試みの発表の場として、また、活発な研究交流の場として機能している。そして、日本全国にとどまらず全世界に向けて発達研究の重要性をアピールし、発信し続けている。ここに来て、ある程度の年数と研究成果を積み重ね円熟の域に達しようとしている学会誌を創刊号から振り返り、その足跡をしかと見定めることは、これからの研究発展に必ずや貢献することであろう。

本稿を執筆するにあたって、上記の学会誌を選んだ理由としては、人が生まれてから死ぬまでの人生全般の発達研究を扱っていることが第一に挙げられる。というのも、母子関係は人が産声を上げたその瞬間から始まり、親が死んでなお心に残る大切な関係性として、生涯を通して続くものだと筆者は考えるからである。母子の関係性は、子の成長や親の成熟とともに変化を遂げるが、どの年齢段階であれまたいつの時代であれ、人間関係の基本として人の生涯発達にとって重要な意

味を持つことに変わりはあるまい。また、もう一つの理由としては、人の生涯発達全般を扱った研究成果・知見が網羅的に収められているこの学会誌をレビューすることにより、先行研究の到達点や今後の課題が明らかになるだろうという期待がある。ここで把握した母子関係研究の近年の動向と概観をもとに、これからの自身の研究の方向性を定めてゆけたらと思う。

母子関係研究と一口に言っても、その内容や方法は多岐にわたり、これまでにも多くの研究者が探究を試み、膨大な量の知見が積まれてきた。また、生涯にわたって続く母子関係は、どの発達段階を対象とするか、どういった点に焦点を当てるかによってその内容は大きく異なってくる。どの研究が母子関係を扱ったものであり、どの研究がそうではないのかを明確に区別するのは難しく、人によってもその判断は異なるだろう。ここでは、母子を対象とした研究、母子間の関係性が問われている研究、何らかのかたちで母子の関係性に言及している研究を取り上げることとした。さらに、焦点を絞るため、論文の詳しい内容にまで言及するのは妊娠・出産・育児というライフイベントに着目して考究したものに限った。本稿で取り上げる研究は、あくまでも筆者の主観的な判断で選択されていることを予めご了承いただきたい。

本稿ではまず、本年度の日本発達心理学会第 19 回大会（2008 年 3 月 19～21 日、大阪国際会議場）における学会発表から、近年の母子関係研究の動向を概観する。そのうえで、これまでの学会誌掲載論文のなかから、筆者の関心である成人期以降の女性同士の母子関係を扱った研究に焦点をあて、いくつかの論文を取り上げて詳細に検討し、今後の課題を探る。

2．学会発表の概要（日本発達心理学会第 19 回大会）

母子関係を扱った個人ポスター発表のなかで、筆者の目に留まったものをピックアップし紹介する。研究の概要を、発表者名（発表番号）［対象者／方法］とともに TABLE1 に記す。

まず、乳幼児期の母子を対象とした研究の特徴として、観察研究が主流であったことを記しておきたい。これは、いまだ言葉をうまくしゃべることのできない乳幼児を対象にしているため、致し方ない側面もある。何をするにも母親の手助けが必要な乳幼児を観察の対象とする場合には、そのそばにいる母親も含め、その相互作用のなかで子どもの行動が発現している可能性がある。ここにあげた母子関係に関する研究以外にも、乳幼児の個体能力発達を実験的に検証した発表は多く見受けられたが、その際にも、その場に居合わせているであろう母親の存在が子に与える影響を無視することなく、考慮にいれるべきことを強調しておきたい。

次に、思春期から青年期にかけての母子関係の研究では、方法として質問紙が用いられることが多かった。回答のしやすさ、量的データの集めやすさにその理由は求められるだろう。そのような傾向のなかで、興味深いのは、西山 (PA191)、久保田 (PB192)、橋本 (PC197) などに見られるように、言語的表現だけでなくイメージ画や絵といった視覚的表現による調査方法がこの時期には多く採用されている点である。質問紙や面接法などと併用することにより、多角的に母子関係を捉え考究できる可能性を秘めている。また、人の心に直接働きかける視覚的表現を用いることで、言葉の壁を越え文化間の比較検証ができるなど、世界へと通用する研究の発展が望めるだろう。

そして、成人期を対象とした研究は、母子関係を子（娘）の視点から捉えたものと親（母）の視点から捉えたものに大別された。これは、成人期の女性が、結婚・出産を経て妻・母でありながらなお娘でもあるという、複数の役割を担っていることに起因する。特に子どもを持つ女性は、自身の母親との関係と、子どもとの関係という二つの母子関係を同時並行的に生きており、その語りから得られる言葉には含蓄の深いものがあるだろう。この時期の調査方法として、半構造化面接が大半を占めていることも頷ける。語りたい思いや語るべき言葉を豊富に持つ成人女性に対して、その内面にまで深く切り込める最適な方法と言えるだろう。多くの研究が、質的な分析により協力者の語りの持つ力をそのまま伝えている点も評価できる。今後ますます、このような手法の研究の増加と隆盛が予想される。

今回の大会発表では、高齢期の母子関係を扱った研究は見受けられなかった。全体として乳幼児期から青年期にかけての人生前半の個体能力発達を扱った研究が多いという印象を受ける。人は一人で成長するのではない。人間関係の基本として個人の生き方に深く影響する母子関係の、生涯全般にわたる研究を切望する。

TABLE 1　日本発達心理学会第 19 回大会発表概要

乳幼児期の母子対象

清水光弘 (PA090) [8 組の母子／子どもが 16 ヶ月と 20 ヶ月のときの母子相互作用場面を縦断的に観察]遊び場面における視線行動と身振り行動を中心に、母子間の共同的関わりの発達を時系列的に分析。

水野里恵ほか (PA111) [6 ヶ月健診受診児の母親 163 名／質問紙]6-18 ヶ月齢の乳児の気質的個人差と母親の分離不安との関連を 2 回の縦断的質問紙調査により、尺度を使って測定、相関を求める。

小池はるかほか (PA116) [三重県内の 1 歳半児観察に参加した母親 165 名／郵送による質問紙調査]1 歳半児を持つ母親のレジリエンス、周囲のストレッサーが母親の精神的健康に与える影響について検討。

山田汐莉ほか (PA136) [神奈川県内の幼稚園児計 48 名とその母親 48 名、担任保育者 3 名／個別面接、質問紙調査]対人葛藤場面における幼児のレジリエンスの違いによる母親の認知と介入行動の関連。

金丸智美 (PA177) [親子教室に通う母子 80 組／母子遊び場面をビデオ録画、EAS により評定]母子関係性の特徴を Emotional Availability から捉え、母子 EA の組合せをもとに母子 EA のタイプと特性を検討。

内池千佳 (PB145) [3 組の母子／約 1 年間の間に 2 ヶ月に一度のビデオ観察]母子の人形遊びの様子を縦断的に観察。子の人形操作の発達に母の働きかけや個性がいかに影響するか、その構造と過程を分析。

思春期・青年期対象

三浦香織 (PA174) [大学 1 年生女子／自由記述の質問紙および面接調査、中高生／質問紙調査]いわゆる「友だち親子」にある子どもたちがその関係性のなかで依存から自立へと成長していく様子を捉える。

堀篤美 (PA183) [小 6・中 2・高 3 の 3 時点で子ども用質問紙調査 56 名、保護者用調査 39 名]親子を対象にした追跡調査を継続的に行い、子どもの親に対するイメージや親子関係の変化を検討。

水本深喜ほか (PA186) [25 歳以下の大学生 263 名（女子 175 名、男子 88 名）、その母親 237 名、母娘 147 セット／質問紙]青年期の娘と母親の密着的関係の実態と自立への影響、精神的適応との関連を分析。

西山直子ほか (PA191) [女子学生 245 名（平均年齢 19.5 歳）／イメージ画]孫娘の視点から捉えた祖母―母―娘三代の関係性をイメージ画で表現してもらい、複数世代にわたる女性のライフストーリーを提起。

久保田桂子 (PB192) [女子中学生 19 名、女子大学・院生 20 名／各年齢段階における母娘関係を 2 つの円で描く Circle Drawing 法]青年期に対する回想法的先行研究の結果を異なる年齢段階で追試。

橋本秀美ほか (PC197) [大学生・院生・専門学生の 243 名（男性 15 名、女性 228 名）／質問紙と母子画]母子関係と共感性について、愛着スタイルおよび家族機能と共感性の発達との関連を検討。

宮本敦子 (PC198) [中 1～高 2 の娘を持つ父母／半構造化面接]協力者の子どもを娘と限定し、娘の思春期を体験する際に父母が感じる戸惑いや自身の変化、配偶者との関係の変化などを語りから抽出。

成人女性対象（娘としての視点から）

坂上ちおり (PA159) [30 代の独身女性 3 名／半構造化面接]現在の親との関係をどのように認知し、関係の変化や役割逆転がいかなる力動によって生じているのかを語りから GTA を用いて質的に分析。

中川奈緒子 (PA195) [初産の妊婦 3 名／妊娠 6 ヶ月、妊娠 9 ヶ月、出産後の 3 時点で半構造化面接]過去から現在までの自分の母親との関わりと理想の母親イメージとの関連を GTA を用いて質的に分析。

松岡陽子 (PB191) [30～48 歳（平均 36.1 歳）の男性 3 名、女性 5 名の計 8 名／半構造化面接]中期親子関係について、両親との別居に注目し、特に 30 歳代前半の女性 3 名について語りを図解化、整理。

成人女性対象（母親としての視点から）

三林真弓 (PA170) [29 歳女性／半構造化面接調査]筆者が主催の子育て支援活動に以前参加していた女性が、自分が母親となったときにその活動が実際の育児にどのように影響しているかについて報告。

江上園子 (PA199) [子育て期にある母親 28 名（平均年齢 32.6 歳）／半構造化面接]母性愛信奉傾向の個々のタイプと日常場面での心理や養育態度との関連を面接により聴取し、エピソード記述により分析。

北村琴美 (PC181) [30 歳前後の成人の娘 363 名とその母親 244 名／質問紙調査]娘のライフイベントを機とした移行期に着目し、母親側の視点から娘との関係性と母親自身の心理的適応との関連を検討。

3．ライフイベントに着目した母子関係研究

（1）母親としての成長

妊娠・出産といった女性ならではのライフイベントは、それまで娘（子）であった女性が母（親）になるということで、自己の役割意識に変化をもたらすものである。ここでは、そういった女性特有の体験に焦点を当て、そこから母子関係を考察した研究を紹介する。

まず、我が子をおなかに宿した妊娠期の女性が主観的にとらえる母子関係の変化を検討した岡本ら(2003)の研究がある。これは、まだ実際に見たり触れたりすることのできない我が子の存在を妊婦が直接的に感じることができる胎動に着目し、これを胎児とのやり取りととらえて、子が生まれる前からすでに始まる主観的な母子関係を考察したものである。初産妊婦 33 名（出産時点で平均 30．06 歳、25～39 歳）に胎動日記の記載を依頼し、1 日 1 回程度を目安に記録することを教示したものの、どの胎動を記録するかは協力者に委ねることとした。これにより、妊婦の胎動への主観的な思いを積極的なものとしてとらえることが可能になった。胎動は、妊婦の意図とは関わりなく生じるもので、胎児の自発的・主体的な行動としてその存在を母親に知らしめるものである。よって、まさに母子一体の時分から、妊婦が胎動を通して胎児を自分とは別個のものとして受けとめ、新たなる母子関係を築き始めていることがわかる。こうして、娘は母になってゆく。この研究では、胎児との主観的な母子関係が始まる過程を記述することにより、妊婦が母親となりゆくプロセスの一端を描くことに成功したといえるだろう。子が生まれる前からすでに始まる母子関係、興味深いテーマである。

さて、女性は妊娠あるいは出産すれば自動的に母親になるのではなく、子育てを通して自らを母親と思えるようになるという（大日向，1988）。1990 年代に入り、生涯発達心理学的観点から、子育てを「親になる」経験として捉えるようになり、その積極的意義を問い、子育てを通した成人期発達の多様なあり方を見出すための取り組みが進められてきた（例えば、柏木・若松，1994；小野寺，2003，2005；森下，2006 など）。

柏木・若松（1994）は、「親となる」ことによって親にどのような人格的・社会的な行動や態度に変化が生じたか、すなわち親自身の発達・成長を、就学前幼児（3～5 歳児）を持つ父親及び母親 346 対を対象として比較検討を行った。そして、親になることによって柔軟性・視野の広がり・生き甲斐・自己抑制・自己の強さなど多岐にわたる面で変化がみられるようになり、その変化は父親よりも母親のほうが大きいことを指摘している。この研究では、いますでに親である男女が親になる前の自分を回想し、自己認知に基づいて変化量の評定をするという手法をとっている。そのため、調査者自身も方法論的限界として挙げているように、親になることによる人格的変化を客観的な変化量として捉えられていないという課題が残った。

この課題を解決すべく、小野寺（2003）は、妊娠 7-8 ヶ月から親になって 3 年の間に、親自身の自己概念がどのように変化するかに焦点を当てて検討した。厳密に考えれば妊娠中の女性が「親」であるか否かについては議論の余地が残るものの、同一対象について親になる前と親になって後の時点とで測定を反復し、継続的な調査を実施することに成功した点は評価できる。結果として、親になると自己概念は変化すると報告した先の柏木・若松（1994）と異なり、この研究では、親になった後も自己概念は比較的安定していた。得られた結果の違いを、小野寺は方法論的相違と自己概念の捉え方の違いとして考察している。小野寺（2003）の研究では、自己概念を「活動性」「怒り・イライラ」「情緒不安定」「養護性」「神経質」「未成熟」の 6 尺度を用いて測定していた。気質的な側面を示す自己概念が比較的安定していたとはいっても、自己概念への評価値が調査期間を通じて一定であったわけではない。統計的に有意差は出ていなくとも各個人の自己概念には微妙なズレがあらわれており、全体としては自己概念にズレが生じていたといえる。自己概念全体として捉えることにしたのは、個々の自己概念の要素はバラバラに機能するのではなく、相互に影響しあって機能していると考えたからである。その結果、女性の場合は妊娠中の身体的・心理的変化による戸惑いが自己概念全体のズレに関連していることが明らかになった。

これら二つの研究はそれぞれ別の尺度を使用し、その尺度の基となる概念的定義の違いや方法論的相違により異なる結論が示された。また、後者の研究では尺度間の相関を考慮し、その人の全体としての主観的認知を考えることにより、有意義な結論を導くことがで

きた。このことから、尺度による測定値や統計的有意性はさることながら、それのみならず、もっとその人の全体像をとらえ、内面にまで深く踏み込んだ質的研究の知見がほしいところである。そこで、ナラティヴアプローチの枠組みを用いて、女性が日々の生活や個々の人生の展望を語るなかで行われる子育ての意味づけを探究した、徳田(2004)の研究を取り上げよう。

徳田(2004)は、子育て期の女性が育児経験を自らの人生や生き方との関連でどのように捉え、意味づけているかを、語り(narrative)を通して明らかにすることを目的に調査を行った。具体的には、第1子が3歳未満で、家庭で子育て中心の生活を送っている女性11名を対象に詳細な面接調査を行い、ナラティヴアプローチの立場から、質的コード化の手法(Coffey & Atkinson, 1996)を用いて分析した。質的コード化の手法とは、データに即した分析カテゴリーを生成する質的分析法の一つであり、予め設定された枠組みではなく、データそのものからカテゴリーを生成し、分析に用いるものであるという。これにより、協力者によって語られた言葉の一つひとつ、そこに込められた様々な思いを丁寧に掬い取ることが可能になった。結果として、「子育ての意味づけ」の類型化とそれに対応する5つの意味づけパターンが明らかされている。それらは各々「自明で肯定的なものとしての子育て」「成長課題としての子育て」「小休止としての現在」「個人的成長としての現在」「模索される子育ての意味づけ」として特徴づけられた。最後に、これらのパターンを「受け入れ方略としての意味づけ」の枠組みから整理し、子育て期女性の意味づけのモデルとして提示している。

(2) 母であり娘である存在として

ここまで見てきた研究は、妊娠・出産といった経験を通して、生まれ来る次世代との母子関係を扱ったものであった。しかし、そういった女性に特有の出来事というのは、同時に、母からつながる女性の系譜をそれまで以上に意識する契機ともなる。親への移行期の娘は自らの育児を経験しつつ、被養育体験の振り返りを行うと考えられており(Levinson, 1996)、自身の母親との関係性は、この時期の女性にとって殊に重要な意味をもつものであるといえる。そこで、成人期の娘の結婚・出産というライフイベントに着目し、心理的適応と母娘関係の関連を探索的に検討した北村・無藤(2001)の研究を次に紹介する。

北村・無藤(2001)は、母娘関係が成人の娘の適応状態を規定する度合いを検証するとともに、結婚や出産といったライフイベントによって母娘関係がどのような発達的移行を経るのかを調べるために、成人女性415名(27～34歳、平均年齢29.8歳)を対象とした横断的データに基づき、独身女性・既婚で子どもがいない女性・既婚で子どもがいる女性間での比較検討を行った。その結果、〈母親との親密性〉は、独身女性の適応状態との間に強い相関が見出され、既婚で無職の女性との間にも有意な関連が認められた。一方、〈母親への過剰な依存・接触〉は、職業の有無に関わらず、既婚で子どもがいない女性の心理的適応と負の関連を示していた。また、ライフイベントによる成人期の母娘関係の発達的移行に関しては、既婚で無職の女性は、独身あるいは有職の女性と比較して、母親との親密性が高く、母親に対してサポートを求める気持ちの強いことが明らかになった。

この研究では、横断的データに基づき、既婚・未婚の別、子の有無、職業の有無により異なる女性間で比較検討を行ったわけだが、ライフイベントによる関係性の変容を本当の意味で確認するためには、同一対象による継時的変化を捉えた縦断的な研究が必要となってくる。その際には、数量的なデータの多寡ではなく、変容プロセスを丹念に追い、個々の内実にいかに迫れるかが問われる質的研究が適しているだろう。この難関に挑んだのが、次の中川(PA195)の研究である。

中川(PA195)は、初産の妊婦を対象に、自分がなりたいと思う「理想の母親イメージ」を問うと同時に、過去における被養育体験・母親との関係性を詳細に調べ、幼少期から現在までの母親との関わりと理想の母親イメージとの関連を明らかにすることを目指した。具体的には、初産の妊婦3名に対して、妊娠6ヶ月／妊娠9ヶ月／出産後のそれぞれの時点で、上記の内容に関する半構造的なインタビューを行い、グラウンデッドセオリーに基づいた質的方法で得られた語りを分析した。その結果、〈Ⅰなりたいと思う理想の母親〉、〈Ⅱなれないかもしれない理想の母親〉、〈Ⅲなってしまうだろう必然的な母親〉の3つの母親イメージを見出した。これら3つの母親イメージには、出産経験が

大きく影響しており、出産を経て実際に子どもと触れ合うことで母親という立場を自ら経験し、理想の母親イメージが具現化され、自分の母親に対する認識にも変化が生じていた。目の前の子どもに対する母親としての感情が、当時子どもであった自分に対する母親の感情と重なり、実感を持って当時の母親の思いを追体験することにつながったのだと中川は考察している。出産・育児を機として、これからの母親としての自分を展望すると同時に、これまでの母親との関わりを見つめ直し、新たな関係性を築いてゆこうとする娘の気持ちをよく捉えた貴重な研究といえるだろう。

4．むすび

本稿では、妊娠・出産・育児といった成人期女性にとってとりわけ重要な意味を持つライフイベントに着目して、近年の母子関係研究を概観した。そこでは、これから新たに始まる次世代との母子関係と、これまで自身の母との間に築いてきた母子関係の二つが重なり合うなかで、母としてあるいは娘としての自分をもう一度見つめ直し、自己や周囲との関係性を再構築しようとする女性の姿が描かれていた。これらの母子関係研究を概観するなかで見出された近年の動向と課題を最後に述べて、本稿の結びとしたい。

まず、従来の母子関係研究（特に乳幼児期）において大半を占めていた観察法・質問紙法により横断的なデータを一度に採取する量的研究に加えて、面接法などを用いて同一対象者を縦断的に追う質的研究が増えていることが窺えた。どちらの研究方法も一長一短があり、研究目的に応じてどちらを採用するか選ぶ必要はあるが、ひとつの研究で量的・質的両方の要件を満たすのは難しい。一回の研究や一人の研究者では達成できなくとも、同じ問題意識を持つ研究者同士の交流や議論により、多くの知見が共有され、発達心理学全体としてこの分野の研究が進展することが望まれる。

次に、ここに紹介した研究では、母子関係を表題として掲げながらも、その内容を詳細に検討してみると、女性の「個」としての発達・変化あるいは人格的成長を扱ったものが少なくなかった。母は子の存在なくしては母たりえず、母と子は相互に影響を及ぼし合いながら共に成長してゆくものである。そこには、母・子それぞれの「個」としての成長だけでなく、母子一組の「関係性」としての発達もあるはずである。近年、発達心理学の全般的な傾向として、個人を取り巻く様々な「関係性」が個人の能力発達に果たす役割とその重要性が認められ、個人の能力と関係性との相互補完的で循環的な発達モデルが模索されるようになってきている（石谷, 2007）。そのような流れの中で、今後、母子関係研究を標榜するのであれば、それぞれの「個」としての母子双方の発達に目を配ることはもちろん、母子を一つのシステムとして捉え、その「関係性」としての発達を見る視点が重要になってくるであろう。

参考文献

石谷真一．（2007）．*自己と関係性の発達臨床心理学―乳幼児発達研究の知見を臨床に生かす*．東京：培風館．

柏木惠子・若松素子．（1994）．「親となる」ことによる人格発達：生涯発達的視点から親を研究する試み．*発達心理学研究*，**5**（**1**），72-83．

北村琴美・無藤隆．（2001）．成人の娘の心理的適応と母娘関係：娘の結婚・出産というライフイベントに着目して．*発達心理学研究*，**12**（**1**），46-57．

Levinson, D.J. (1996). *The seasons of a woman's life*. New York: Alfred A. Knopf.

森下葉子．（2006）．父親になることによる発達とそれに関わる要因．*発達心理学研究*，**17**（**2**），182-192．

中川奈緒子・小島康生．（2008）．妊娠期から出産後にかけての女性が抱く理想の母親イメージ：過去における母子関係との関連に焦点を当てて．*日本発達心理学会第19回大会発表論文集*（PA195）．

大日向雅美．（1988）．母子関係と母性の発達．*心理学評論*，**31**，32-45．

岡本依子・菅野幸恵・根ヶ山光一．（2003）．胎動に対する語りにみられる妊娠期の主観的な母子関係：胎動日記における胎児への意味づけ．*発達心理学研究*，**14**（**1**），64-76．

小野寺敦子．（2003）．親になることによる自己概念の変化．*発達心理学研究*，**14**（**2**），180-190．

徳田治子．（2004）．ナラティヴから捉える子育て期女性の意味づけ：生涯発達の視点から．*発達心理学研究*，**15**（**1**），13-26．

（修士課程）